

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 1 0 回高松市創造都市推進懇談会（U 4 0 / 第 5 期）
開催日時	令和 4 年 1 1 月 2 1 日（月） 1 8 時 3 0 分～ 2 0 時 3 0 分
開催場所	高松市役所 1 1 4 会議室
議 題	「第 5 期 U 4 0 の成果報告について」
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	穴吹委員、湯川委員、熊野委員、二川委員、大石委員、三木委員、棟近委員、若林委員、大崎委員、中村香菜子委員、西森委員、林委員、松井委員、宮武委員
市職員 U 4 0	佐々木、上原、齊藤、三好、平岡、藪下
政策課	好井補佐、前場企画員
事 務 局	大西市長、中川局長、一原参事、次田部長、塩田部長、今池課長、平井補佐、岡本係長、伊藤主事
傍 聴 者	0 人 （定員：5 人）
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 8 3 9 - 2 4 1 1

審議経過及び審議結果

1 開会

（事務局から開会挨拶）

2 「第 5 期 U 4 0 の成果報告」について（市長と意見交換）

【会長】

（第 5 期 U 4 0 の活動について発表）

【副会長】

Q 1 6 の「高松は、子育て世代が暮らしやすい街か？」という設問に関して、担当した委員に実感を聞いてみたい。

【委員】

Q 1 8 の「高松は、L G B T Q が暮らしやすい街か？」や Q 1 9 の「高松は、障がいを持っている人が暮らしやすい街か？」の設問も同じだが、子育て世帯ではない人もこのアンケートを答えているため、当事者でない人がどれだけ子育て環境について分かっているのかが点数に反映されているのでは

審議経過及び審議結果

ないか。

現在、子育てをしていない人達こそ、分かっていなければならない。妊娠前の人や独身の人へのアプローチがまだまだ足りていない。

自由記述欄で、明石市に言及した記述が多々あったが、明石市の住民は、日常的に子育てしやすい街と感じているから、もう1人産もうという気持ちになりやすいのではないか。

当事者以外の人に、高松市の支援や施策がどれだけ伝わっているかが大切である。そうすることで、自分が当事者になった時に、高松市なら安心とってもらえる。

母親だけでなく、子育てに関係ない人も含めて、皆で子どもを育てていく状態を目指すために、子どもがいない世帯に、高松市にどのような施策があるのかを伝える工夫が必要である。

子どものいない人に、子どもとかかわることができる機会づくりが必要ではないか。

【市長】

子育てしやすい街とは、周りの協力が得られる街である。

明石市は思い切った子育て支援施策を取っているが、高松市に適した子育て支援施策の充実だけでなく、PRも大事だと考えている。

【副会長】

次に、Q12の「高松は、芸術活動が盛んだと感じるか？」の担当委員に話をしてもらいたい。

【委員】

Q12の「高松は、芸術活動が盛んだと感じるか？」は一定の評価が得られている一方で、Q13の「高松はアーティスト活動を仕事として生活したいと思える街か？」は評価が低い。

アーティスト活動は仕事としての認識が低いようだ。また、介護や子育てをしながら、アーティスト活動をするのは大変であるという認識を持っている人が多いようである。

【市長】

瀬戸内国際芸術祭の開催をきっかけに、移住も含めて、アーティストが多く訪れるようになり、比較的芸術活動がやりやすくなっている。一方で、アーティスト活動だけを仕事として生活していくのが大変だということは認識している。

創造都市の概念の根底には、多様性の尊重があるが、その象徴として、アーティストたちが活躍できる街を目指したいと思っている。

【副会長】

他に、市長に聞きたいことがある委員はいるか。

【委員】

Q20の「高松は、働きたいと思う会社がある街か？」という設問に関して、「会社員」に比べて、「高校生」が高評価傾向である。

現在働いている会社員が自身の勤める会社を魅力的だと思っていないことは、課題ではないか。行政として、こういったバックアップや取組を考えているか。

【市長】

高松の場合は、大学進学で8割の学生が県外へ進学してしまい、就職で戻ってくるというのも難しい状況にある。

若者に需要があるような、業種をしぼった企業誘致等も行っているが、外からの企業誘致だけでなく、地元企業にも対しても各種助成を行っている。

若者にとって魅力的な、定着できるような地元企業の育成を支援していきたい。

また、「ニッチ企業」と呼ばれる独自の魅力のある企業もあるが、そのマッチングに行政が入り、香川や高松に、そのような企業があるということを発信する必要があると考えている。

移住を目的として、東京に「瀬戸・たかまつ移住&キャリアサポートセンター」がある。移住に当たって大事なものは、どのような仕事に就けるかであるので、具体的に企業について説明しながら相談にのっている。このような形でU・Iターンを支援している。

【委員】

もっと高校生にアピールしていく必要があるのでは？

【市長】

行政として、高校生に企業を紹介する場を設けていきたいと思っている。

【委員】

Q15「高松での生活に、家族、友達の助け合いを感じるか？」という設問に関して、困りごとを抱えている人が多様化する中、助けを求めているも声を上げられない人達について、市長はどう考えているか。

【市長】

地域コミュニティの中で「助け合い」の精神等を作っていく取組を行っている。また、地域共生社会構築の取組として、各総合センターに「つながる福祉相談窓口」を設置し、プッシュ型で、専門機関へつなぐシステムを構築している。

様々な支援機関があるので、連携や情報共有によって、助けが必要な方を支援していく。

お互い様精神で助け合える、高松型地域共生社会の実現を目指している。

【委員】

地域共生に関連して、学校現場において、子どもたちの多様性への理解が足りていないように感じる。自由度が低く、大多数のために少数者が我慢しなければならない状況が、行政・学校現場では依然としてあるように感じる。

【市長】

LGBTの小中学生への支援として、学校教員の理解を促すため、研修を行っている。

また、不登校の生徒に関しては、教育支援センターが「新塩屋町 虹の部屋」や「みなみ」といった居場所を作って、支援している。

【委員】

支援施策としては、足りていない。民間に委託するなども、検討してほしい。学校に行けなくても、通える場所ができれば、高松市がとても良くなると

思う。

【委員】

Q16「高松は、外国人が暮らしやすい街か？」に関して、高松市は、外国人に訪れてほしいという動きが盛んだが、移住に関してはどのように考えているか。

【市長】

外国人向けの観光に関しては力を入れており、成果も出ているが、外国人の移住に関しては積極的には支援を行っていない状況である。世界志向を掲げているので、将来的には日本人・外国人関係なく、移住を支援したいと考えている。

3 「第5期U40の成果報告」について（第5期の振り返り）

【委員】

第5期を通じて、楽しく活動できた。

「高松市通信簿」に関しては、10段階で評価することが難しいという声もあったので、来年以降も改良して、継続実施できれば、もっと多くの回答が得られるのではないかと。他ではない取組だと思ふ。

【市役所U40】

市役所で働いていると、自分の所属する部署の仕事が中心となりがちで、他の部署の取組等に目を向けることが少ない。また、民間の方とかかわる機会、特に、自分の仕事と違うジャンルで活躍する方と意見を交わす機会がほとんどないため、視野が非常に狭くなったり、考え方が凝り固まっていたりと感じることがあった。U40に参加して、個人的に大きく成長する経験になったと思ふ。

【委員】

U40に参加しなければ、出会えないような方に出会い、その活動の話聞く貴重な会議だった。コロナ禍で、外国人の入国が減るに伴い、自分自身の活動への情熱も下がる中、U40が定期的にあることで、自分の活動について見つめなおす機会となっていた。

「高松市通信簿」のように、データを分析して発表するのは苦手だったが、報告書を作成し、形に残すことで、行政に影響していくというのは、良い勉強になった。

【委員】

普段接することのない、市の職員や子育て分野の方とかかわる中で、異なる観点を知り、勉強になった。

情報発信等民間の会社としてできることをやっていきたいと思っているので、コラボレーション等、他の委員とぜひ行いたい。

【委員】

第5期を通じて楽しい会だった。多忙な時期もあり、他のU40委員と十分話せなかったため、この反省は第6期にいかしたい。

様々な分野の委員とかかわり、今後の仕事や生き方を考えさせられる時間だった。自分自身もU40で得たものを発信したい。

【委員】

農業の分野から参加しているが、外の業種と接点が少ない世界のため、他の委員の話が新鮮で、農業の世界とコラボレーションできることがあるのではという、ひらめきが生まれた会だったと思う。

「高松市通信簿」に関して、様々な課題がある中で、何がキーワードになってくるのかを引き出すような設問にすれば良かったと思う。

【市役所U40】

市役所で働いていても、自分の担当する業務以外の分野について、高松市の取組を知らなかったのが、勉強になった。

他の委員が精力的に活動しているのを、Facebookの投稿で見て、良い刺激となっていた。

【市役所U40】

今まで見識を深めたことのない分野の方とかかわることができて、貴重な経験となった。U40活動の中で、データを分析して、回答するような作業が多かったが、委員それぞれ仕事があり、時間の制約がある中で、深掘りできなかった部分があるのが心残りである。

【市役所U40】

「高松市通信簿」の作成に当たって、改めて漆器について客観的に考え直す機会となった。

「高松市通信簿」の取りまとめを担当していて、それぞれの委員の立場等を鑑みながら、アンケート結果を深く考えることができてよかった。

今後、現在の担当業務と違う分野に携わる時には、Facebook上で、いろいろな熱い活動が出てきているので、そういったものを取り込んでいきたいと思っている。

【委員】

何かに特化して活動するというのをこの2年しておらず、何にも所属していないというところが他の委員と違うところだったと思う。何にも所属していない、活動していない人が高松市にはいっぱいいると思うので、そのような街の人々とU40がかかわる機会があれば、市に対して興味が出て、考える機会が生まれると思う。来期のテーマとしても良いのではないかな。

【市役所U40】

様々なジャンルで活躍されているU40委員とかかわることができて良い経験になった。精力的に活動されて、高松のこれからを考えているような委員で構成された会だったので、実りのあるものになったのだと思う。次期（第6期）の活動にも注目しながら、自身の仕事に今後、いかしていきたい。

【委員】

他の委員とちょうど良い関係を築くことができ、次期（第6期）についても携わりたと思った。

多様性という言葉がキーワードとして出ていたが、U40に参加して、様々な人がいるということを知ることができた。誰もがいつ子育てや障がい者等の当事者になるかわからない中で、何か一つでも役に立てることがあればと考えている。

【市役所U40】

育休中に、実際に「ぬくぬくママSUN'S」やコミュニティの活動に参加する中で、地域の力や民間の活力のすごさを感じたのがきっかけでU40に参加した。

2年間参加した中で、他の委員の活躍が刺激になり、勉強になった。

モリローさんがおっしゃっていた、「伝えることじゃなくって伝えることが大事」という言葉が心に残っている。行政の立場で情報発信することは多いが、発信しただけで、実際伝わってないことが多々ある。当事者でない方にも情報が届くような形の情報発信の仕方はとても大事な一方で、難しいことでもあるので、民間の委員の、情報発信の仕方は参考になる部分があった。SNSの活用の仕方一つにしても、行政と民間は温度差があり、とても勉強になった。

民間の方と市の職員がU40のように、同じ場所で同じ温度で集まる機会は他になく、化学変化が起きる場になっていたと思う。

【委員】

U40参加当初は、普段が主婦のため、他の委員の話に混じれるか不安だった。他の委員から、子育て当事者の意見は貴重と言ってもらい、積極的に発言して、満足できる4年間になった。

高松市では移住リーダーとしてかかわっている。

「高松市通信簿」のデータは、移住に関しての意見等が多かったので、他の移住リーダーも共有して、今後にいかしていきたい。

【委員】

U40参加当初は、なかなか発言ができず、不安だった。

話せなかったこともたくさんあるが、最終回を無事に迎えることができよかった。次期（第6期）は、他の委員ともっと交流して発言に一貫性を持てる人間になっていきたいと思っている。

【委員】

他の委員と交流を持ち、普段、自分が携わっている世界との差を知ることができて良かった。人前で話すのは不得意だったが、それをしなければいけないU40の中に入り、自分に何ができるのか考える機会になった。

【委員】

4年間U40活動を通して、自身の価値観や考え方が変化し、大きな勉強になった。

コロナ禍で、自分の団体の活動も、ママと子どもたちだけの関係から、もっと多様な人が手を取り合いながら子育て、子どもにかかわっていける社会へとように大きく変化した2年だった。

今期で卒業となるが、他の委員や市役所と交流を持ち続けたいと思っているので、いつでも声を掛けてほしい。

【委員】

4年間活動して、U40が何をするのかよく分からないと感じていた。

「高松市通信簿」に関しては、色々な話が聞けて勉強になった。

次期（第6期）に関しては、事務局と話し合い、第5期の反省をいかして運営してほしい。

【副会長】

U40が何を狙っているのか分からないところがあったが、他の委員の協

力を得て運営することができ、感謝している。

人間同士の価値観みたいなものが、非常に感じられた会だったと思う。

次期（第6期）に参加する委員だけでなく、卒業する委員についても、かわりを持ち続けていきたいと思っているので、ぜひ声を掛けてほしい。

【会長】

まちづくりを、まちの将来を担う世代が異分野から集まって議論する場は非常に稀有で、何かが生まれるのではないかと信じて第5期U40を運営していた。

反省点は多々あるが、第5期で得た人脈、人間関係はまず財産だと思う。これを活用し、今後も同世代で活躍する行政と民間同士、メンバー間の交流はぜひ継続していきたい。

また、事務局に提案したいことが、2点ある。

1つ目は、若い世代を積極的に委員に登用してほしい。30代後半のメンバーが多く、もっと若い世代の意見を広く拾える組織構成である必要を感じた。

2つ目は、第1期～第5期で築いたU40委員の人脈をいかしてほしい。10年間の本事業を通して、より良い街づくりに貢献しようとした活動したメンバーは、所属した期や分野は違えど同じ共通体験を持ち、それを持つ者同士が交流することにより新たな価値創造が起きる可能性は非常に高い。これは高松市が本事業を通して得た人脈という財産であり、現在はこの人脈という市の資産が有機的に生かされていない状態にあることは大きな課題と考える。具体的には、webサイト制作（過去現在のメンバーが今どうゆう活動をしているか、現在所属している課などが分かるメンバー表が掲載されたもの）や交流会を行ったりすれば、現役・OBOGメンバーが能動的に事業外でも積極的に活用、ひいては本市が目指す創造都市推進の原動力のひとつになり得ると考える。

4 閉会

（創造都市推進局長より挨拶）

（事務局から事務連絡をして閉会）